MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．２．２　発行元
第 443 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

佐々木譲『樹林の檻』

１２月に角川春樹事務所から佐々木譲の道警シリーズ第十作の『樹林の檻』が出た。２年ぶりの新刊ということになる。私の好きなシリーズのひとつで、今回もいつものメンバーが大活躍をして楽しませてくれる。

日常の仕事の中から

前作同様、津久井、佐伯などレギュラーメンバーは殺人の捜査本部からはずされたままで、重要ではない日常の仕事を割り当てられている。かつての道警内部の腐敗事件の時に正しいと思う道を貫き、仲間を裏切ったという首脳部の判断が続いているためである。まあ、佐伯は父親の介護をしなければならない状況に追い込まれているので、かえって有難い部分もあるのだが…。

スタートは各自の日常の活動から動き出す。大通り警察署の佐伯はホテルの枕探しで捕まった女性の対応から。その後、法律事務所への忍び込み事件の処理に出掛ける。生活安全部の小島は札幌駅で保護された小学３年生の女児の対応に。機動捜査隊の津久井は石山通りで起きたひき逃げと見られる事件に向かっていく。普段の動きそのもの。

何気ない糸口から関連が…

前作の『雪に撃つ』でもそうだったが、それぞれの取り組んでいる事件が微妙なところで結び付いていくのが読みどころ。目の前にしている家出、盗み、ぼったくり事件の証言中から気になる一言に執着して、陰に隠されていた大きな事件が次第に見えるようになってくるという流れ。上手に組み立てられている。

雑誌『ランティエ』に一昨年から去年にかけて連載された作品ということで、コロナ禍の状況も取り入れられている。舞台は最初のゴーツートラベル開始の時期に設定されている。観光業、飲食業などが苦しい状況に追い込まれた実態を踏まえている。（それが延々と続くとは当時は思わなかったけれども…）

後半は追い詰めていく緊迫感

後半の全体像が少しずつ見えてくる段階からスピードアップする。考えていたことがピタリピタリと当てはまるようになり、犯人が絞られていく。肝心の捜査本部を置き去りにして、遊軍メンバーの仲間で突っ走っていく。中心の事件は旭川関連なのだが、現在犯人は札幌にいるらしいことが分かり、居場所を追い詰めていく。

犯人グループがいずれ捕まるだろうと予測はつくものの、流れるようなサスペンスは佐々木譲の得意とするところ。メンバー一人一人の特徴を生かして結末に持っていくところはさすが！！

警察小説としての仕上がり

警察小説の形式は現在大流行ではあるが、最も伝統的で正統的な形を受け継いでいるのは佐々木譲だと思う。マクベインの『８７分署』やシューヴァル＆ヴァールーの『マルティン・ベッグ』シリーズで構想されたものの魅力が生かされている。「捜査の過程」に中心がある。日本の他の作家の作品は、警察官自身が抱えている内面の問題や、犯人の人物像、犯罪そのものの理屈付けなどに重点が行き過ぎている。

佐々木譲の『道警シリーズ』

１．笑う警官
２．警察庁から来た男
３．警官の紋章
４．巡査の休日
５．密売人
６．人　質
７．憂いなき街
８．真夏の雷管
９．雪に撃つ
１０．樹林の檻

現在は、最新作の『樹林の檻』以外は、いずれもハルキ文庫に入っており、切らさずに版を重ねているので、どこの書店でも手に入れやすい。

佐藤青南　『お電話かわりました名探偵です　復讐のジングル・ベル』

１２月に角川文庫から出た本。シリーズ三作目になる。佐藤青南の得意とする「お仕事ミステリ」のひとつ。１１０番通報を受けるＺ県警本部通信指令室が舞台。１１０番通報でわずかなやり取りをしただけで、事件の真相を見破る「万里眼」と噂される君野いぶき先輩と、その隣の席に座る早乙女くんの物語。

連作形式の第一話は『大怪獣、現る！』で、子どもの声で「怪獣が暴れている」と通報が入る話。聞いてみると「怪獣ボズラが口から火炎放射しながら歩いている。お城に閉じ込められている女の子を助けてほしい」と訴えた。いたずら電話ではなく、真剣な声。さて、これをどう判断するか。出動命令を出してパトカーを向かわせたのは…。最終第五話が本書の一番の山場で、「万里眼」に恨みを持つ男が、いぶき先輩を拉致誘拐してしまう話。犯人は１１０番に連絡を入れ、「万里眼」を電話に出せと要求してくる。通信指令室メンバー一体となっての救出劇。本シリーズは早乙女くんといぶき先輩とのラブストーリーの行く末が読みどころになっているので、結末に向かって一気に読み進められる。今回は行動重視で、ミステリ味はやや薄め。